

2006 年度実習生にむけて

日本語文化専攻日本語教育学講座 日本語教育実習担当

鷲見 幸美

本年度の実習に、3名の留学生が参加してくれたことを、嬉しく思っています。将来は、自国で、母語（中国語）を媒介語とした日本語教育に携わることになるわけですが、それとは環境が大きくなる実習に、3名が参加してくれたことには大きな意義があります。これからの日本語教育において、海外でも、多文化共生を目指す日本でも、母語話者教師と非母語話者教師の協働はますます重要になってくると思うからです。実習を通して、みなさんそれぞれが、母語話者教師としての自分、非母語話者教師としての自分を再認識し、日本語を母語とする教師と母語としない教師の協働のあり方を考える機会になったのではないのでしょうか。

春季実習だけに参加したみなさん、春季実習だけでは単位にならないことを承知の上で、参加したみなさんの気持ちを買いたいと思います。教壇実習、録画した授業の文字化、報告書の春季実習部分の作成は、思っていた以上に負担の大きいものだったようですが、責任を持って取り組んでいたと思います。僅かな実習経験ですが、みなさんの人生において、何らかの形で生かされることを望みます。

夏季実習、研究レポートにも取り組んだみなさん、学生募集からこの実習報告書をまとめる最後の段階に至るまで、実によく協力し合い、妥協せず、全てのプロセスにおいて真剣に取り組んでいました。夏季実習を終えて流れた4人の涙は、私に多くのことを語ってくれました。例年とは異なることの多い中、よくやり遂げたとと思います。私自身、見習うべきことがたくさんありました。研究レポートについては、独りよがりな記述があることも否定できませんが、それも成長の一プロセスだと思います。いつかこの報告書を読み直してみてください。新たに気づくことがきっとあると思います。今後、これまで以上のパワーで、常にチャレンジし続けていってください。これからの益々の活躍を楽しみにしています。